

学び方を学び、実践すれば……

国語のテスト終了後、生徒と教師の会話である。

T「テストの文章を読むのに時間をかけすぎているかい。
設問をまず見てから、次に文章を見ることはないの？」
C「しません。いい文章だなあと、じっくり読んでいます。」
T「(あきれて)・・・テストを受ける時は、……」

この生徒は、授業中も文章の世界に浸ることが多かった。文学的な文章を味わう上で、読み浸るという行為は決して悪くはない。ただ、テストでは時間不足になり、見直しができないという課題があったのだ。以後、この生徒は、そのやり方を修正し、点数が向上したという。もし、小学校でこの指摘を受けていたら、この生徒の人生は違っていただろうか。

ところで、記述式テストでは、どんな指示をすればいいのだろうか。

◆質問の意味をはっきりさせる。

- ・分析せよ→ 重要な特徴を示すように批判的に吟味する。
- ・比較せよ→ 2つ以上の事柄の間の類似点、差異点を示す。
- ・対照せよ→ 2つ以上の事柄の違いを示す。
- ・定着せよ→ はっきりとした、しかも正確な意味を述べる。
- ・詳述せよ→ テーマや考え方をいっそう詳細に述べる。
- ・説明せよ→ 問題や理論の細かい点を明らかにし解釈する。
- ・要約せよ→ 文章や話の要点を短くまとめる。

◆内容・順序をメモする。 質問の意味が分かってもすぐ答えを書かず何をどの順序に書くかを欄外にメモする。

◆時間の割り振りをする。 答えを書く余白の大小を参考にする。

◆誤りや文法に注意する。 長すぎず、短すぎず、句読点もうつ。

◆要点を中心に書く。 知っていることを全部書く必要はない。

◆必ず読み返す。 誤字、脱字等はないか検討。

「学び方の科学 辰野千壽 図書文化」より引用

このような技術を一度に指導することは無理である。小学校から「学び方を学ぶこと(技術)」「他の場面に応用すること」を具体的に体験させる積み重ねが肝要である。勿論、読み浸る経験を通して意欲や習慣も付けさせたい。

いずれにしても、機会を捉えての指導は重要である。



特別支援教育だより「いきいき」について

先生方におかれましては、平成19年4月から34号を数えました特別支援教育だより「いきいき」を長らくご愛読いただきまして、誠にありがとうございました。平成23年度からは、その内容を総合教育センターだより、「街路樹」に引き継いでいくことになりました。

今後は、特別支援教育の内容も、「街路樹」の中で取り扱って参りますので、(今後とも)ご愛読の程、よろしくお願ひ申し上げます。

子どもたちの心のケアについて

既に街路樹緊急号「災害に遭遇した子どもの心のケアの基本的対応」としてを平成23年3月31日付で配信しておりましたが、再度、重要なポイントを補足します。

【子どもの心に寄り添って】

- 1 支援者である先生方の心のケアが大切です。
- 2 子どもたちの心のケアについて(PTSDの予防のために)
 - (1) 一人一人の状況が違うということを念頭にいただいた心のケアを。
 - (2) 子どもの話をよく聴き、個別の状況に合わせた支援を。
 - (3) ひとりで抱え込まず、組織的にケース会議等で話し合つて。
 - (4) 難しい事例については、臨床心理士やスクールカウンセラー等の専門家につないで。
- 3 心のケアについての基本的理解について
 - ストレスの影響や回復は人によってさまざまです。本人の気持ちをしっかり受け止め、安心感が持てる環境・雰囲気の中で個別に話を聞いてあげてください。
- 4 子どもへの接し方について
 - (1) 子どもに安心を与えるように努力してください。
 - ① 大人自身が落ち着いた態度で接してください。
 - ② 不安で騒ぐ場合は叱らず、言葉だけでなく抱きしめるなどして安心させてください。
 - (2) 子どもが悲しみや恐怖の感情を話さようなら、十分に聞いてあげてください。恐怖体験を思い出して落ち着かない時は、子どもが理解しやすい言葉で安心させてあげてください。
 - (3) 子どもをひとりぼっちにしないでください。
 - (4) 年齢によっては、手伝えることがあれば手伝わせ、子ども自身が役に立っていると感ずることができるよう働きかけてください。手伝ってくれたら必ず誉めてあげてください。
 - (5) 他の子どもとよく遊ばせましょう。

震災3ヶ月後の取組＝体験の振り返り＝

(参考資料「災害を受けた子どもたちの心の理解とケア」兵庫県教育委員会)

被災後3ヶ月経過のころ、学級では震災当時のことが話題にのぼるようになっていた。また、反抗的な児童と話をすると、震災でストレスを感じている様子だった。そこで、職員会等の中では、震災に向き合い、みんなの体験を出し合うような話し合いをすればどうかという意見が出た。「そつとしておいた方がいいのでは」との意見もあった。最終的には、「放置は根本的な改善にならない。今、手だてを講じる方が良い方向にいくのではないか」という結論に到った。保護者とも相談し、多少の不安やためらいはあったが、理解と協力を得ることができた。

話し合いに当っては、自分のことを言いたくないときは、聞くだけでもいいこと、聞いたことを学級以外の人には言わないこと等を定めた。



事例のポイント

被災後しばらくしてから、級友と体験を振り返ることが心のケアにつながることもある。この際、スクールカウンセラー等と相談しつつ、保護者の理解を得て、話し合いのルール等にも配慮しながら進める必要がある。